
受け継がれたモノ

ぴこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受け継がれたモノ

【Nコード】

N7483T

【作者名】

ぴこ

【あらすじ】

その男

銀色の髪に血を浴び

戦場を駆る姿は

まさしく、

夜叉

敵はおろか味方からも恐れられた彼は

何を想い

何がために戦ったのか

そして、そこから得たモノは何だったのか―――…

今、明かされる。

※これは銀時が幼少から今に至るまでのことを自分なりに表したものです。

プロローグ（前書き）

初心者ですm（ m

文の構成おかしいですが、どうか温かい目で見てください（・・・）

プロローグ

ヒュオオオオオ——…

生暖かい風が吹き抜ける。

——此処は戦場。

辺りには屍がゴロゴロとゴミのように転がっている。

そこに一人。

屍の身を剥ぎ、命を繋ぐ童がいた。

そいつは今の御時世には珍しい、銀色の髪、深紅の瞳の少年。人々は彼を“化け物”として扱い、恐れていた。

そしていつしか付いた名は

“屍を食らう鬼”

誰もが少年を殺そうとした。

“鬼は災いをもたらす”などと、くだらない噂をたてて。
だが、少年を始末しに行った者は二度と帰ってくることはなかった。

ある時、突然現れた男は少年に剣を与え、言った。

『そいつの本当の使い方を知りたければ、ついてくるといい』

『これからはそいつを振いなさい』

『敵を斬るためではない』

『弱き己を斬るために』

『己を護るためではない』

『己の魂を護るために』

すべては——

この時より始まった。

この出会いが、少年の人生を——

運命を大きく変えた――……。○

プロローグ（後書き）

何か、ナレーション多ッッ！！！！泣
大変読みにくいと思います（／＼；）

銀ちゃんを始末しに行った人達は

皆返り討ちにあってるっていう設定です m
〔
m

第一訓

「私の名は吉田松陽。この先で小さな村塾をやっています。

——君の名は？」

ピクッ

松陽に背負われている少年が反応する。

「坂田……銀時」

長い間口を開いてなかったのか、銀時の声は少し哽れていた。

「銀時……。良い名前ですね」
フフッと微笑む。

思いもしなかった言葉に銀時は大きく目を見開いていた。

変な奴……。。

ザッ、ザッ、ザッ

向かいの道から農具を持った男が歩いてきた。
銀時は反射的に松陽の背中で身を縮ませる。

「おお、先生。こんにちは」

「こんにちは。お疲れ様です」

一しきり話を終え、帰ろうとした……が。
背中で身を隠していた銀時に男は気づいた。

「せ、先生！！そいつぁ……！……鬼子じゃねえか！？何故先生が！？」

鬼子——！……。

誰もが俺をそう呼ぶ。でもまちがってない。

そう考えていても、体は震えていた。

「鬼子……？何の躊躇もなく、よくそんなことが言えますね」
松陽の声のトーンが低くなる。

ぎゅうつ——！……

小さな手に力が入る。

早く……どっかいけ……！！

「そんなこと？先生、この餓鬼が何者か知らねえのかい？“屍を食

らう鬼”ですぜ？……コイツと関わるのはやめてくだせえ。先生のためを思っ言ってるんだ。わしらの村のためにもコイツは殺した方がいい」

！！

「先生、そのソイツをよこしな。始末はわしに任せてください」

ドクン、ドクン

胸が激しく脈を打つ。

殺られる。

「貴方は同じ人として何も感じないのですか？」
松陽は静かに言い放った。

「な、何言って…？」

「この子のどこが鬼のですか？まだまだ小さな子供じゃないですか。こんな幼い子を殺して何が変わるというのですか？私には貴方の方がよっぽど醜い鬼に見えますがね」

男は言葉を詰まらせる。

……コイツ、俺を庇ってんのか？

「次から、言葉にお気を付け下さい」

うつ、と圧倒された男をよそにお辞儀をして再び歩き出す。

チラッ

銀時が後ろを振り返る。そこには鋭い目付きでこちらを睨む男が立っていた。

その目は銀時に向けられている。

唇を噛み締め、睨み返す。口の中に微かに血の味が広がった。

俺を見るあの目――…何度も何度も見てきた。

男の口が動く。

“シネ、バケモノ”

パツと目を逸らす。

畜生……。気にくわねエ。

第一訓（後書き）

会話が少ないですね（・・；）

次回は子銀さんが先生に

少し心を許す感じになります（^◇^）

第二訓

あれから無言だった松陽が突然口を開いた。

「確かに…、お前の犯した過ちは重い。許されない事です」

「……………!」

「…けれど、人は変われる。お前は変わらなければなりません」

俺が…変わる？

「私の所で学びなさい。一から叩きなおしてあげますよ」

「……………いい」

ん？と松陽は耳を傾ける。

「……降ろして。俺といると、アンタも色々言われる」

「また、あんな所に帰るつもりですか？」

歩く足がピタリと止まった。

「銀時、お前は一生身剥ぎをして生きていくつもりですか？」

「それは……」

口ごもる銀時をそっと背中から降ろす。

「いいですか？お前の居場所はもう、あんな所じゃありません。お

前はもう、一人じゃない。

……私がいる。仲間だっています」

「少しずついいのです。今までの事は忘れてしまいなさい」

「忘れる…?」

「はい、過去に囚われる必要はありません。今のあなたがこれからどう生きていくかが大切なんです」

「でも、……俺は他の奴等と違う。それに、俺といたらアンタまで周りの奴から――!」

「馬鹿言うんじゃない。お前は普通の子供と何ら変わらない

私のかわいい弟子の一人ですよ」

「!誰がアンタの……っ」

「周りの者が何と言おうが、銀時は銀時だ。それに……お前の答えはもう決まっているはず。私と来るのか、来ないのか」

「……………」

俺の答え——？

「さて、私のことはアンタではなく、先生と呼んでもらいましょうか」

もしくは松陽先生でもいいですよ。と微笑みながら言った。

「俺…ついていくとか言ってねェけど？」

「それでもお前はここまで来た。それが銀時の答えだったのでしよう？」

「……………」

「ほら、言ってみてください」

「……………」

やっぱ、コイツ変わってんな。

でも————

この人は他とはちがう気がする————。

『ついてくるといい』

そう言われて、単純に嬉しかったのかもしれない。

俺は———……

信じてみたい……。

この人を———。

「……………せ…んせ……………」

「聞こえませんかよー」

「も…もう一生言わねえ!」

「フフ…」

銀時の頭を優しく撫でた。

銀時かというと、恥ずかしさで頬をぷくつと膨らませている。

スッ、と松陽は手を差し伸べてきた。

「さ、帰りますよ……………銀時」

銀時は松陽を見上げる。

“銀時” 名前を呼ばれたのはいつ以来だろう。いや、これが初めて

だ。

名前を呼ばれることはこんなに温かいものなのか。
自分のことを“鬼”でも“化け物”でもなく、“銀時”として見て
くれた人。

先生……松陽先生……

人の温もりを初めて感じた。

重なった手から、松陽の温もりが伝わってくる。

あったけエ……………。

第三訓

「さあ、着きましたよ」

小さな門をくぐるとそこには少々古びているが、立派な屋敷が建っていた。

周りには、まるで屋敷を包み込むかのように満開の桜が咲いていた。初めて目にする光景にあんぐりとしている銀時。

「その格好じゃいけませんね。まずは身体を綺麗にしましょう」

「え、ちょっ…!」

銀時は松陽に浴槽へと引っ張られていった。

湯船からはほんのり薪の香りが漂っている。

「時間がないのでぬるま湯ですが…」

と、少し申し訳なさそうに言う。

「気持ちいいですか？」

松陽は銀時の髪を洗いながら聞いてきた。

「普通」

そっけない返事をする。

「いでっ! ちょっ…! アンタの手の泡、目に入ってる!」

松陽はハッとして、わー! すみません! と慌ててお湯で洗い流す。

「銀時、先生って言うてくさいよー」

鼻歌を歌い、銀時の頭をタオルで拭きながら言ってきた。

「はっ? ヤだよ」

少し顔が赤くなって恥かしそうにしている。

「銀時、顔赤いですよ」

「ばっ！ちげーよ。風呂入ったからだ！」

松陽はからかいながらも優しく頭を拭く。

あ…、コレ、先生の匂いだ。何か知んねェけどホツとする。

気持ち良さそうにしている銀時の頬を両手で覆い、松陽は目を合わせてきた。

「な…なに？」

「ストレート髪の銀時も粋ですね」

まじ？と、瞳を輝かせている。

松陽は銀時の額に自分の額を合わせて、グリグリと顔を左右に振ってきた。

「その顔ですよ。少し表情が和らいできましたね」

「え…？」

「やっぱり、誰でも笑顔が一番似合いますね」

「……」

俺、笑ってた？

「もっともっと、笑ってください」

コイツ、ほんと変な奴だな。
でも…かなわねえや。

銀時は自然に笑っていた。

それから松陽は銀時に合う着物を着させてくれた。

「さあ、皆はもういる頃でしょうね。銀時と同じくらいの子供達が待っていますよ。行きましょう」

銀時はその言葉にピクツと反応する。

「さ、早く。少々遅れてしまっていますから、急がなければ」

松陽は銀時に刀を手渡して、2人は浴槽を後にした。

長い廊下。

キシキシと歩く度に床が音を上げている。

微かに子供の騒ぐ声が聞こえてきた。

銀時は刀を両手に抱えて、途中よろめきながらも松陽の後を追う。

次第に騒ぎ声は大きくなり、松陽はある部屋の前で立ち止まる。

銀時は無意識のうちに松陽の着物の裾を握っていた。

「緊張していますか？」

「！」

裾を握っていた手をあわてて離す。

「全然してねーしっ」

「大丈夫ですよ」

優しく声をかけてくれる。

先生は、俺のこと何とも思っ
てねーみてえだけど…先生の
“おしえ”っていう奴等は、俺
の事受け入れられんのか？
決して口には出さないが、そ
んなことを考えている銀時。

そして、松陽は襖に手をかけた。

第三訓（後書き）

次話は銀さんと晋助とヅラが出逢うときです☆

晋助視点でいききたいと思います一応（^^）；

第四訓（前書き）

■Cherryさんコメント有難うございました♪

これでまた完結させたい気持ちが大きくなりました（^^

第四訓

先生…おせエ。

苛立っているせいか、落ち着いていられない。
他の奴も先生の心配をしている。

「高杉」

声の主の方へ高杉と呼ばれた少年は不機嫌そうな顔を向ける。
そこには見飽きた面があった。

「やはり、何かあったのではなからうか」
不安そうな表情で俺を見ってくる。

「まさか、先生に限ってんなことあるワケねえだろ。馬鹿か、ヅラ」
「ヅラじゃない桂だ。しかし、もしそうだとすれば……」

「うるせエ、馬鹿」

「馬鹿じゃない、ヅ…桂だ。…せっかくの登場シーンで噛んでしまったではないか。責任とれ」

「知るかボケ」

「…探しにいかんか？不安になってきた」

ちっ、俺だって不安だったの。

先生は遅れる時はいつも俺達に言って出掛けるんだ。けど、今日は言われてない。

探しに行くか――？

ヅラに従うのは気に食わねえけど…。

立ち上がろうとした時だった。

スウツ――

部屋の襖がゆっくりと開いた。

子供達の視線が襖に向けられる。

そこにはいつもどおりの松陽がいた。

ほっ――

高杉は安堵の息をはき、腰を下ろす。

桂も「よかった」と一言はくと、自分の席に戻っていく。

松陽は皆がいることを確認すると中へと入ってきた。

「遅れてしまいました。申し訳ありません」

「心配したよ。先生」

子供達は騒ぎ始める。

「今日は君達に紹介したい人がいます」
そう言うとお襖の方に目をやる。

皆もつられて目を向けた。

しかし、姿を現さない。

誰だ？紹介したい人って…。

興味はなかったものの、頬杖をつきながら顔を向ける高杉。

「猫か！？」

目を輝かせながら真面目な顔で言う桂に

「なわけねーだろ」と高杉がつっこみを入れる。

「ほら、大丈夫ですよ。入ってきなさい」

松陽が優しく声をかけると、ゆっくりと銀時は入ってきた。

目を丸くする子供もいれば、口をポカンと開けている子供もいた。

皆今まで見たことない姿をしている少年に驚きを隠せないでいるのだ。

あ———……

俺、コイツ知ってる。

銀色の髪と紅い瞳…“屍を食らう…鬼”だっけか？

意味は分からないが村の奴等が噂にしているのを聞いた。

“ヤベェ”って。

そんな奴を何故先生が？

高杉にとって、そんな噂はどうでもよかった。

けれど、村人から気味悪がられている子供が松陽のそばにいる事で、松陽が何か言われないか、

ただそれが心配でしかたなかったのだ。

一見、俺らと変わらない普通の子供に見えるんだけど…

鬼——？コイツのどこが鬼？

大人のいうことは理解できない。

高杉は視線を落とす。

———！？

な…何で？

俺の目に飛び込んできたのは銀髪が抱えている刀だった。

刀は強く、しっかりと握られていた。

あれは———：

見間違えるワケがねエ。

松陽先生の刀———！

何で、コイツが持ってたんだ？

疑問よりも、初めて見る奴が先生の刀を持っているということに苛立ちを感じていた。

「皆さん、今日から共に学び、過ごしていく仲間を紹介します」

松陽は銀時を見て、名を名乗るように伝えたがフイツとそっぽを向いてしまった。

何だ、コイツ。

ますます気に食わねエ。

けれど、松陽は微笑んでいる。

「フフ、すいません。まだこういう事には慣れていないので…。この子の名は坂田銀時。皆さん、仲良くできますね？」

「「はい!!」」

一人を除いては皆元気よく返事をした。

銀時は松陽から教科書を渡されると、一番後ろの縁側に近い席に案内され腰をおろした。

そして松陽の普段と変わらない授業が始まる。

皆は教科書を持って、真剣に松陽の話を聞いているが、高杉は銀時が気になって集中できなかった。

後ろにいる銀時の方をチラッと見る。

銀時は始めはボーッと外を見ていたが次第に目がとろんとしてきて、後ろの壁にもたれかかり…寝てしまった。

は???

何寝てんだよ。先生が授業してんだぞ!聞けよ!

つか、寝るときぐらい刀離せての。

ムカつく奴。

寝ている銀時を睨むと高杉はふてくされながら松陽の話を聞き始め

る。

そんな高杉の様子を横目で見ていた桂。

高杉：大方苛々しているのだろう。

しかし、銀時という奴。

始まって早々寝込み入れるとは、中々面白い奴が来たものだ。
フツ、と軽く笑うと桂もまた、松陽の話を聞き始めた。

坂田銀時

桂小太郎

高杉晋助

これが攘夷戦争で英雄と語り告げられた三人の出会いだった。

第四訓（後書き）

第五訓

「さて、今日はお終いにしましょう。皆さん気をつけて帰って下さい」

持っていた教科書をパタンと閉じる。

ゴロゴロ――

「雲行きが怪しくなってきましたね」

子供達が次々に帰っていく中、高杉はぐっすり寝ている銀時の元へ動く。

「いい加減起きやがれ」

バコツと銀時の頭を殴る。

「いって…、何しやがる」

「テーマ先生の授業聞かずに寝てんじゃねエ！ボケ」

「やめんか高杉！」

割って入ってきた桂にチツと舌を打つ高杉。

「すまない銀時。最近カルシウム不足でなコイツ」

「黙れヅラ」

「ヅラじゃない桂だ。そうだ銀時…」

「……？」

きよんとした顔で桂を見つめる。

「俺は桂小太郎、好物はそばだ。よろしくな。」

…おい、貴様も名乗らんか」

いきなり桂が言い出したので、戸惑っていた高杉だったが

「…高杉晋助」

少々抵抗気味に頬を膨らませて言った。

「無愛想な奴だな。気にするな銀時、照れているだけだ」

「てっ…照れてねえよ！」

2人の言い争いを無言で見ている銀時。

「オメーら帰んなくていいの？」

2人の手が止まる。

「帰るワケなかう、銀時一人にして」

桂は笑いながら答える。

「何か、松陽先生用事あるらしいから、帰ってくるまでテメーというように頼まれたんだよ」

「まあ、俺達は頼まれてなくても銀時と一緒にいるつもりだったが

な！」

な？高杉？と視線を送る。

「ぼっ…、俺はそんなじゃねえし別に」

「素直じゃない奴だな」

「うっせえ！！」

また争いが始まった。

何だかんだ言って2人は銀時の事を心配してくれていた。

「そうだ！銀時！団子食べないか？」

争う手を止めて銀時の方にキラキラと視線をおくる桂。

「団子？…食いモンか？」

「そうだ！うまいぞ！実はな、戸棚に団子を隠しておったのだ」

「ヅラァァ…その団子。俺がさつき、後で食おうと思って残しておいた団子のことじゃあるめエな？」

「……待っている！すぐ持ってくるからな！」

「ヅラァァァ！待ちやがれエエエエ！！」

高杉は無視してすばやく走っていった桂をものすごい形相で追いかけていく。

「騒がしい奴等…」

はあっ、と呆れながら呟いた。

初めて会ったばっかなのに――

どうしてこいつらは俺に構うのか…。

銀時の頭にある言葉が浮かんできた。

『仲間がいます』

仲間――

これが仲間――？

そう考えていた矢先――…

ドスツツ

「うぐっ…っ…」

鈍い音がしたかと思うと、突然腹に激痛がはしった。
顔を上げようとする、首を掴まれ、そのまま倒されてしまった。
何が起きたか分からない。

「死ねえっ…！」

どこかで聞いたことがある男の声。

「！…っ…はな…せ…」

相手の腕を掴み抵抗するが、力は及ばず。

だ、誰か…

叫ぼうとしても、喉を押さえられているため声が出なかった。
しだいに意識が遠のいていく。

その時――

「貴様アア!!何をしている!!」

「銀時から離れやがれエエ!!」

戻ってきた2人の怒鳴り声で、銀時の首を絞めていた手が緩まり、その隙に高杉はその場にあった置物を男めがけて投げた。置物は男の顔面に当たり、うぐおお、と呻き声をあげて地面にうずくまる。

「っ…げほっげほっ…」

「無事か!?!」

「貴様、何者だ?」

男が顔を上げる。

「!…アンタ…さっきの…」

その男は、さっき会った村人だった。

「お前は、此処にいるべきじゃねえ」

「何を言っている? 貴様」

男の言った意味が分からず、桂は怒りに満ちた目で男を睨む。

「はっ！知らねえのかい…。こいつが何者なのかを…」

男は再び、こちらに向かってくる。

銀時はすばやく松陽の刀をとり、構える。

刀を構える銀時に男はうろたえていた。

「な、何をしている銀時？」

「斬りはしねエ…」

“斬りはしねエ” って、お前真剣扱ったことあんのか!？」

銀時のとった行動に驚きを隠せないでいる桂と高杉。

こうでもしねえと…。

次は本当に殺られちまう。

「……くっ」

あきらめた男は銀時に言った。

「…どう足掻こうが、お前さんに居場所なんてモンはねえ。わしらは誰も、お前さんが此処にいることを望んじやいない」

「!!」

「……先生は一体、何をお考えになつとるんじゃ…」

唾をペツ、と吐くと男は逃げるように屋敷から出て行った。

「待ちやがれ！ テメツ…！」

「高杉！ 先生のいない今、深追いしてはならん！」

「チィッ」

舌打ちをすると、銀時の方に目をやる。

高杉と桂が思っていることは同じだった。

「オイ、何なんだ？ あのヤローは…。何でテメーを？」
高杉は、刀をぶら下げて固まっている銀時に問うた。
しかし、返事がない。

銀時…。お前は何かを隠しているな？

先程の男、あれは完全に殺意を抱いていた。

それに、男が言っていた事も気になる。

お前は一体、何者なんだ？

そう桂が考えこんでいると

カシャン、と銀時の手から刀が落ちた。
そしてそのままフラフラと歩き出した。

「おい、銀時…どこに…」

「……散歩」

「待て！ その怪我で行ってはならん！」

銀時の首には痛々しい跡が、しっかりと残っている。

しかし、2人の声が銀時に届いてないのか、力のない足取りで門の方に行ってしまう。

そんな銀時を桂と高杉は止めることができなかった。

第六訓（前書き）

ちまちま編集をやっているので
見るたびに話の内容が変わっているところがあります m
〔
m

第六訓

ザアア———...

雨は激しさを増すばかり。

「銀時イイイ!!」

「返事をしろオオオ!!」

雨でかき消される声。

あの後、松陽が帰って来て高杉と桂は事情を話し、銀時の帰りを待った。

しかし、いつまでたっても帰ってこないのに胸騒ぎがしたのか…
今に至る。

「先生…、銀時はもう帰ってこないのでしょうか」
不安げに松陽に問い掛ける桂。
帰って来る——。そう信じたいのだが、何も答えられない。

「銀時に一体何があったんだ？」

高杉の問いに桂も頷く。

松陽は黙って考え込んでいた。

「先生！」

高杉と桂の視線が真っ直ぐ松陽に向けられた。好奇心で言っているのではない。この子たちは本気で銀時を心配し、信じているのだと確信した。

「銀時がどんなことをやっていたとしても…全てを受け止める覚悟はありますか？」

コクンと大きく頷く二人を見て微笑む松陽。

「銀時は——…」

松陽は話した。

知っている限りの銀時の過去を全て——。

今まで見剥ぎをして生きていたこと。

屍を食らう鬼と呼ばれていたこと。

自分の命を守るために、人を斬っていたこと。

人とはちがう姿のせいで恐れられていたこと。

ずっとずっと孤独だったこと。

「銀時は闇の中でもがいています。今も、きっと…」

「まだ幼いのに…彼は、酷い経験をしていたのです」

話し終わると、高杉と桂は啞然としていた。

「…そんな苦しい思いを、銀時はしていたのですか？」

目に涙を浮かべて聞く桂。

「はい」

高杉は唇を噛み締め、怒りをあらわにしていた。

「何が鬼だ、くだらねエ…。アイツはただ必死に生きていただけだろ!？」

「……晋介、小太郎」

静かに呼びかけた松陽を見上げる2人。

「銀時と一緒にいたいという気持ちは変わっていませんか？」

2人は強く、はっきりと答えた。

「当り前です」

「当り前だ」

―――…

ぬかるんだ道にポツンと立ち、夜空を仰ぐ一つの影。
雨はいつしか止み、雲の隙間から月が顔を出していた。

ここが何処なのか分からない。
ただ呆然と立ち尽くす。

「銀時」

「！」

この声は――…

「随分と長い散歩ですね。何をしていますか？」

そっ、と松陽の手が頬に触れる。

……！

「アンタ…ずっと、探してたのか？俺を」

先生の手、冷たい。

「こんなに濡れて、風邪でもひいたらどうするんですか？

…晋助と小太郎が心配して探してましたよ」

「…アイツ等が――？」

「これは…」

松陽は銀時の首の跡に気づいた。

「な、何？」

「…すみませんでした。私がいなかったばかりに…」

「こんくらい、ヘーキだっつもの。大袈裟な……！？」

松陽は銀時を抱き寄せた。

「……………本当に？」

「……………」

真っ直ぐな松陽の言葉に負けた銀時。

「…う、……………びっくりは、した。けど、あーゆーの何度かあったし…それにアイツ等が来てくれたから」

ハハ、と軽く笑う。しかし、感情がこもっていない。

この子は——…、一体どれだけの恐怖を味わってきただろう。
毎日毎日人に怯えて…。

周りに酷い扱いを受けながらも生きてきた銀時は、どれだけの哀しみ、憎しみを持っていたのだろう。
それなのに、なってない笑いまで作って——

「もっと、もっと早くキミと出会っていれば…救えていたのかもしれない
ね」

私は、自分の無力さと不甲斐無さを思い知った。

なんて…私は、ちっぽけなのでしょうね。

「……救われたよ、十分」

「…！」

「俺、アンタと、アイツ等といると…変われそうな気がする」

「銀時…」

「俺、ホントはこのままいなくなるつもりだった…。でも、できなかった。初めてだったからさ…アンタ等みたいなのに会ったの」

少し間をおいて、銀時は言った。

「…俺、いいいいのか？」

松陽はフフッと笑う。

まさか銀時自身からそんな言葉が聞けるとは思っていなかった。

「今さら、此処を離れる理由などないでしょう？」

銀時は松陽の言葉を聞いて安心したのか、全身の力が抜け、松陽にもたれかかった。

「大丈夫ですか？」

「ん、ちょっと…疲れた」

無理もない、今日は色々なことがありましたからね…。

「帰りましょうか」

私は——…

私は、何があっても最期まで護ってみせる。
私の大切なものを——…。

そのためには…動かなければなりませんね。

残酷な運命は刻一刻と迫ってきていた。

第六訓（後書き）

「銀時！先生！」

「まったく…、危ないからあれほど帰れと言ったのですが…」
そう言った松陽だけれど、その表情は嬉しそうだった。

門の前に立つ2人の子供。

高杉と桂である。

2人の目線は銀時をとらえ、こちらに向かってきた。

「銀時！心配したんだぞ！」

「まったく、勝手にほつつき歩きやがって馬鹿天パア」
ボカッと高杉が頭を殴る。

「つてエ…！何しやがんだ！」

銀時と高杉が火花を散らしているところに桂が止めに入る。

「高杉！空気を読め！こうして帰ってきたのだ。よいではないか！
…それより銀時！」

…モフモフしていいですかアアブフォツ！」
高杉のパンチ。

「テメーが空気読めエエ！」

…俺もモフモフしていいですか？」
「オイイイ！！結局オメーもかい！」

ジリジリと近づいてくる高杉と桂。

「ちょっと待て待て、アンタ、こいつらどーにか…」

「モフモフ：悪くないですねえ」

先生もかよオオ！

何？何でコイツらこんなに馬鹿なの？

「「モフモフは俺のものだアアア！！」」

飛びかかってくる高杉と桂、松陽も乗り気のようにだ。

そのまま銀時と桂と高杉は取っ組み合いになり、松陽はその様子を微笑ましそうに眺めている。

すると…

「あ！そうだ！銀時！」

桂がポーンと手を合わせて言った。

「あ？」

忙しい奴だなーコイツも…。

呆れ顔で桂を見る。

「俺達の名前覚えてたか！？」

期待して聞いてきた桂。

高杉も少し気になるようだった。

「あー、うん。まー大体…は」

頭を掻いて、2人に目を向けた。

「ヅラと…バカ杉、だろ？」

「「え？」」

「だぁーかーら、ヅラとバカ杉つぶふおっ！」

桂と高杉のパンチを食らった銀時はそのまま地面にめり込んだ。

「…痛っだ！鼻折れてない！？何すんだコノヤロー！っーか俺さっきから殴られてばっかなんだけど」

「高杉イイ！貴様がヅラヅラ言ってるから、銀時が間違っって覚えてるでしょーがああ！」

「うるせええ！まだマシだろうが！俺はバカ杉なんて一度も言われたことねーよ！コイツ、今作ったな！？こんの天パ野郎が！」

「カッチーン。おめーに天然パーマの苦しみ分かるかアア！」

フフフ、喧嘩してるのかじゃれ合っているのか…。
でも確かに…。

『俺、アンタと、アイツ等といると…変われそうな気がする』

銀時は変わりましたね…。

出会った頃と比べれば、まるで別人のようだ。
小太郎と晋助も…、あんなにはしゃいで…。

私はいいい弟子を持った。

3人がこの先もこうしていられるように、願っていたいものですね。

第七訓

「おーい、銀時？先生？」

パタパタと廊下に響く足音。

銀時がいるであろう寢室を開けると、そこにはぐっすり寝ている銀時がいた。

コイツ、まだ寝ておるのか…。もう正午だぞ…。

「おや、小太郎」

「先生…。銀時と遊ぼうと思って来たのですが」

「まだ起きそうにありませんね」

「松陽先生！、道場に皆集まってるけど」

竹刀を持った高杉が縁側から部屋を覗いて言ってきた。

「では、もう稽古始めちゃいましょうか」

銀時と遊びたかった、と呟く桂を無理矢理引っ張って道場に連れていく高杉。

銀時はまだまだ起きる気配がなかった。

「…んーっ、……」

ようやく目を覚ました銀時。起き上がるまでに少々時間がかかった。

「……………」

ここは…ああ、そっか…。

俺ここに住むことになって…。

……………。

つい昨日までは戦地の中にいて、こんな日がくるとは思ってもいなかった。

頭がついていかねえ…。

実感もわかねえ。

すると

やあっ！と、遠くから声がした。

「なんだ？」

とりあえず屋敷内をウロウロしていたが松陽の姿が見当たらない。
仕方なく声がする方に足を運ぶ。

屋敷の離れに小さな建物が建っていて、そこから声をあげて竹刀を振っている子供たちの姿が見えた。

何してんだ？ 昼間っから…。ヅラと高杉もいるし。

ボーッと眺めていると、桂がこっちに気付いた。

「やっと起きたな！ 銀時の胴着も用意してあるから、まずは着替えろ！」

着替えろつつても、着方が分からなかったから結局ヅラに着付けてもらった。

「何すんの？」

「剣の稽古だ。俺達は学問を学ぶだけではなく、たまに先生から稽古を指導してもらっているのだ」

「その本人が見当たんねェけど？」

「うむ。最近忙しいようだ…。前まではこんなことなかったのだが…」

オイオイ…。指導者のいねェ稽古って…。

そう銀時は思っていたが、案外成り立っているようだった。

高杉を中心に子供たちは声を張り上げ、ただ一心に竹刀を振るって

いる。

「アイツが仕切ってんの？」

「ああ。高杉はこの中でも強い方だからな…」

「ふうーん」

適当に流していると

「何してんだテメー等。さっさとしやがれ」

と、キレ気味の高杉が竹刀を持ってやってきた。

「すまない。ほら、行くぞ銀時」

「え、ちょっと待て。何？俺もやんの？」

「つたりめーだろ、何のために着替えてんだ」

「いやいや、高杉君。僕はいいよ。見とくだけで…」

ただめんどくさいだけなんだろう？と、とため息をはいた高杉は肩にかけていた竹刀を銀時の顔の前に勢いよく突き出した。

「おわっ」

間一髪避けることができたが、至近距離で突いてきたにもかかわらず、それをかわした銀時に桂も高杉も驚いていた。

高杉はフンツと笑うと

「オイ、俺と勝負しろ…銀時」

と、竹刀を銀時の目の前に合わせた。

はあ？

「そうだな。一度手合わせするといい」

ツラまで…。

「だーから、俺やんねーって。負けるに決まってんだろ」

即拒否する銀時。

これは何言っても聞きそうにねえな…。

仕方ねえが…。

何か決心した高杉はビシッと人差し指を銀時に向ける。

「饅頭だ」

「まんじゅう？…が何？」

「今日のおやつ。団子より美味しいものだ。それを賭けよう」

その言葉を聞いた銀時の表情が一変した。

「いいぜ。のってやらあ」

扱いやすいな…。

けど…さっきのかわし方や、前の真剣の構え方を見たかぎり、コイツは強え。

他の奴みたいに一筋縄にはいかねえな。

だが、やるからには負けるつもりはない。第一、饅頭が賭かってるし。

「よし、ならば俺は拝見しておこう。銀時、俺の竹刀を使え」

そう言つて桂は銀時に持っていた竹刀を手渡す。

確かに、銀時は強いかもしれない…。

だが、高杉も負けてはおらんぞ。

何しろ積み上げてきた努力と技がアイツにはある。

銀時はこれに関しては素人だからな。

どちらが勝つか、見物だ。

互いに竹刀を構えて態勢を整える。

銀時と高杉の勝負に練習していた子供たちも寄つて来た。

「構え…始めっ！」

桂の合図で始まった銀時と高杉の勝負。

「こいよ、銀時」

「らあっ！」

竹刀を振り上げ、高杉の頭上に叩きつけた、が、受け止められ、その隙に高杉は銀時の竹刀を押しつけ、そのまま勢いよく振った。高杉の勝ち、と誰もが思っていたが…、高杉の竹刀は空振り。そして後ろに回った銀時が攻めてくる。

その状況に皆は口をポカンと開けていた。

かれこれ何分か過ぎたものの、まだ決着はつかない。

あの高杉とここまでやりあっていられるとは…、大した奴だ。

桂も関心している。

パン、パン

竹刀の交わる音だけが道場に響く。

「ハアツ、ハアツ」

予想以上にやるじゃねーか…。

高杉もさすがに息が上がってきた。

銀時も次第に肩で息をするようになる。

コイツみてえーな強え奴とやりあったのは初めてだ。隙が全く見当たらねエ。

多分、そこら辺の侍よりも、コイツの方が…。

これも、あの先生が指導してるからなのか？

「互角…だ」

2人の勝負を見ていた子供がポツリと呟いた。

「いや…。高杉の方が推している」

桂が言ったことに皆、？となった。

「よく見ろ。竹刀は交えているものの、それは高杉が攻め、銀時が

守っているだけだ」

やはり、経験の差がでてきたな。
多分、もうそろそろ…。

そう思った時――

ガクンと銀時が足をひねらせ、態勢を崩してしまう。竹刀も手から離れ、銀時は丸腰になった。
それを見逃すはずがない高杉。
大きく振りかぶる。

「これで終わりだアアア!!」

パアアアン

「とった……」

!?

そこに銀時の姿はなく、高杉の竹刀は床に当たっていた。
そして高杉の頭にコツンと何かが当たる。

「はい。饅頭いただき」

振り返るとニッと笑い、高杉の頭を竹刀でポンポンと叩いている銀時がいた。

皆はもちろん状況が理解できなかった。

「銀時、ワザと隙を見せたな？」

ワザと態勢を崩し、竹刀を離して俺に隙を見せ、俺が振りかぶった瞬間に素早く立て直して後ろに回ったわけか…。

「終わったんだし、もういいじゃねーか。それより饅頭よこせよ、オメーの負けだ」

「ふざけんな、あんなの反則だ。勝負のうちに入らねえよ」

「オイオイ、どんだけ負けず嫌いなんだよ。俺はまだルールなんてモン知らねえんだよ」

またいつもの様に喧嘩を始める2人の中に、子供達が駆け寄っていく。

「銀時！ すごいな！ 高杉負かすなんて」

「だから、アレは反則だったの！ 俺は負けてねえ！」

子供達も自然に銀時と打ち解けていた。

「全く、無茶苦茶だな…銀時は」
その様子を見ていた桂。

「確かに…無茶苦茶だ」

「わっ！先生！いつからいたんですか？」

いつからでしょう？と笑って誤魔化す松陽。

まだまだ剣筋は高杉より劣っていて、所々欠点がありますが…。頭の回転とあの動き。

…彼はきつと強くなる。

「銀時！次は俺と手合わせしよう！」

銀時と高杉の勝負を見てウズウズしてきたのか、桂が竹刀を持って皆の所にやってきた。

「俺、マジ疲れてんだけど…」

「いざ！尋常に勝負！！」

オイイイ！！人の話を聞けよオオ！！

結局、飛びかかってきた桂に銀時は竹刀を構えるが、幸か不幸か桂の○○に当たり、勝負が始まる前に終わってしまった。

道場の中から笑い声が絶えることがなかった。

第七訓（後書き）

饅頭は高杉の分まで銀時が頂いて、

高杉は縁側でひねくれていました。

話が進みませんね m (m

第八訓（前書き）

WHITE様、コメント有難うございました！
励みになります（●＾○＾●）

第八訓

満天の星空のてっぺんに丁度月が昇った頃。

銀時の寝室には桂と高杉がいた。

銀時はなんでテメー等がここにいんだ？と不機嫌そうにため息を吐く。

桂の「銀時と色々話したい」という発言が事の発端。

今夜は桂と高杉が泊まることになったのだ。

すると高杉が何やら分厚い本を読みだした。

「何だソレ？この年でエロ本かよ。外見ビシツときめといって、中身はドロドロですかコノヤロー」

「ちげーよ。テメエもう少しマシな言い方できねえのか？」

本のタイトルのところに指を宛てる高杉。

「ジャンプってんだ。読んだからいらねーって、多串からもらったんだが俺にはどうも…」

興味なさそうにパラパラと飛ばし読みをする。

その横から銀時が覗いてきた。

「読むか？」

高杉に渡されたジャンプを黙々と読み始める銀時。

「全く、いい年してそんなものを読むとは…先が思いやられるな」

「いやいやヅラ、コレ少年ジャンプだし、俺まだ少年だし」

俺多串君と気が合いそうだわ、と銀時はジャンプが気に入った様子だった。

それから一時が経った。

「先生、何してんのかな」

布団に入り少しウトウトしていた高杉が言った。

「お前、よっぽど好きなのな」

ページをめくる手を止めてニヤリと笑う銀時。

「いちいちムカツク言い方すんな」

と、言うが否定はしなかった。

「高杉が先生を好いているのは本当だ。もう毎日べったり…」

「黙れヅラ」

「ふーん、べったりねえ…」

「してねえよ!」

ムキになって反抗する。

「知っているか? 銀時。高杉はな、俺は先生のようになるって言うていたんだぞ」

「ばっ…! ヅラ! それ言うなっつったろ!?!」

銀時に知られたら絶対馬鹿にされるに決まってるだろーが!

心の中で叫ぶ高杉。

「ププッお前が？」

案の定、口に手を宛てて笑いをこらえる銀時。

「笑ったな！？その口へし折ってやる！」

「落ち着け高杉」

桂の静止が入る。

「大体ヅラ、テメエが言うからめんどくせーことになったんだろ」

ヅラじゃない、桂だ。と、つつこんだ後。

「まあ…高杉の気持ちは分らんことはない。なんせ、俺も高杉も先生に救われたのだからな」

「オメー等が？」

そう言う和高杉が少し間をおいて語り始めた。

「……先生に会うまでは、大人の言うコトなんぞ信じちゃいなかった。けど、先生は真正面から俺達と向き合ってくれた。大切なこともたくさん教わった、だからこそ尊敬してんだ」

高杉の後に桂も続ける。

「俺、養子に出されてな、後継ぎも決まったんだ。父上と母上が俺を大事にしてくれていたことは分かっていたが…それでも居場所がない気がした。そこで松陽先生に出会って、居場所をつくってくれた。本当に感謝しているんだ」

ふーん、と2人の話を聞いているようで聞いていない銀時。

正直、ここまで話が大きくなるとは思ってなかった。

「銀時も先生に助けてもらったんだろ？先生のようにになりたいとは思わんのか？」

桂が布団に入りながら銀時に問いかける。

「俺が？……無理だな。俺アあの人みたいになれねーよ」
手を横に振っていつものダルそうな表情で答える。

「確かに、お前プー太郎になりそうだな。絶対無理だ」

「おい高杉。いっとくがテメーもなれねえよ。眠つき悪イし」

「死んだ魚の目をしてるお前に言われたくねえよ」

「貴様らには向いていない。肉球を手に入れるのは俺だ」
急にガバツと起き上がると、ガッツポーズを決める桂。

「あーダメだ、コイツ話についていけない。どんだけめんどくせー奴なんだよ」

「気にすんな、いつものことだ」

そう言った後に高杉は銀時に視線をやった。

「銀時も松陽先生に惹かれてここに来たんだろ？」

少しの沈黙が流れる。

フツと笑うと銀時は答えた。

「……さあな」

けど、何で先生が周りから好かれているのかが分かった気がする。
高杉と桂が何で先生のことを慕っているのかも。

気付いたら高杉も桂も既に寝ていた。

桂に至っては妙なびきをかいている。

ガタッ

後ろから物音。

それに反応して背筋を強張らせる銀時。

ん？オイオイちょっと待て、…え？今後ろから…いやいや、気のせ
いだ、絶対気のせいだ。……ちよっ、何かこっち来てない？マジ勘
弁してくれよ、コレ振り向いたらいる感じじゃん、バツて出てく
る感じじゃん。べ、別にビビッてねーし、たまにあるんだよな、何
の前触れもなしにホラー映画の予告CM流れるヤツ…あれは心臓に
悪いのでやめた方がいいと思います…アレ、作文？

と、一人であたふたしていると、肩にポン、と手がおかれた。

ビクウウつと体を震わせるが

「ん…？」

「まだ寝ていなかったんですか？」

声の方に目を向けるとそこには灯りを持った松陽がいた。

「何だ、アンタかよ…」

ふう、と胸を撫で下ろす。

「驚かせてしまいましたか？」

「驚いてねえっ！」

銀時の反論にクスツと嫌味な笑いをする松陽。
お見通しのようなだった。

「さあ、もう寝なさい」

「えー、まだジャンプ読み終わってない」

「夜更かしは体に毒ですよ」

灯りを畳に置いて、銀時に布団をかける。

銀時は横になった状態で松陽を見て、ふと、さっき高杉や桂が話していたことを思い出した。

そういえば…俺、まだ――

「あ…」

「？」

その先が出てこなくて、ギョツと口を紡ぐ。

「いや、何でもない…」

「…おやすみ、銀時」

そう言った松陽は灯りを消して、寢室を後にする。

ひっそりと静まり返る屋敷内に虫の鳴き声だけが響いていた。

第八訓（後書き）

銀さんが「ジャンプ歴20年の俺が…」と発言していたことから話を膨らませてみました。

多分、この頃からジャンプ読みだしたと思うんですね。多串君からもジャンプ借りてる感じだったので…。

銀さんが最後に言おうとしたことは、後々分かります。大したことじゃないけれど（＜―＞）

第九訓

パン！パン！

ある日の昼下がり、道場から竹刀の交わる音が響き渡る。

「まだまだ甘いですよ」

「うらあっ！」

そこには松陽と胴着を着て声を上げている銀時がいた。

今日は寺子屋は休みなので、剣術の指導をしているのだ。

竹刀を構えて踏み出した時、疲れがきたのかよろめく銀時。

「んー、少し休憩を入れましょう」。

休憩なんていらねーっの…と思いつつも、渋々竹刀を置いた。

少し待ってて下さいと松陽に言われ、銀時は道場の入り口に座る。

汗をかいているため、微風でも心地よい涼しさが吹き抜ける。

「ふーっ」

さすがに皆に剣を教えているだけあって、先生は強エや…。歯が立たないのは大人だから当り前だけど、それでも気持ちがいい。

人を斬ってきた銀時にとって今までは剣を振るうことが不快でしかなかったのだが、高杉と一手交えた時から自然に楽しさを感じていた。

しばらくすると昼食を持った松陽が戻り、銀時の隣に腰を下ろし、銀時は渡された飲み物をゴクッと一口飲むと、口の中に違和感を感じた。

「ん？これお茶じゃない、何このピンクの飲みモン？」
眉をひそめてピンクの液体をじっと見つめる。

「村の人から頂いた苺と、牛乳を混ぜてみたんです。江戸じゃイチゴ牛乳と呼ぶらしいですよ。口に合わなかったですか？」

最近では段々と村も落ち着いて、村人達も銀時のことを徐々に受け入れられるようになってきた。

それは松陽は顔が広く、有名な人だったためであろう。
今では普通に銀時と接する者もいる。

「旨い」

グイッと一気に飲み干した。

「銀時は甘い物が好きみたいです」

「今度、小豆丼が食いたい」

他愛もない話をしながら、松陽が作った昼食を食べる。

ふと、手を見るとマメができていた。手をじっと見つめ
「なあ、俺どうやったら上手くなんの？」

いつにもなく真剣に聞く。

多少驚いたものの、銀時の問いに真面目に答えた。

「今の銀時はただがむしゃらに剣を振っているだけなんです。筋はいいんですが、それだけじゃ晋助や小太郎のようにはなれない」

アイツ等と比べんなよ…。

まあ、そりゃそうだけど。

でも、だったら俺はどうすれば…？と顔で表すと、

「己の武士道を見つけるといい。銀時はこれが欠けています」

「武士道？何だソレ…？」

「自分のルールみたいなモンですよ」

自分のルール？ますます分かんねえっての。

「そのルールって？」

「それは銀時自信が見つけなければ意味がない。君が強くなりたいと思うのは何故ですか？剣を振るうワケは何ですか？それをじっくり考えるといい」

「……」

考え込んでいると、道場の外から松陽を呼ぶ声がした。

「客人でしょうか、…今日はここまでにしましょう」

えー、と脱力する銀時。

「すみません」

立ち上がってくしゃくしゃと頭を撫でる。

そーやって誤魔化して…。

プクーっと顔を膨らませるが、松陽に撫でられるのは嫌ではない。

「先行っていいよ、俺まだここにいます」

「そうですか…」

暗くなる前に戻るようにと言われ、松陽は客人の方に行く。その先には、厳つい武士とその護衛が2人いた。

たまに屋敷に訪れる客人、銀時は以前、話をしているところを見たことがあったが、その人と話をする松陽はいつもの笑顔でいる松陽ではなかった。

だからなのか、銀時達に決して客人を会わせようとはしない。

松陽の“客人”が何者なのか、この時は知るよしもなかっただろう。

銀時は松陽が屋敷の方へ戻って行ったのを確認すると、道場の中に入り竹刀を構える。

「俺が、剣を振る理由…」

ブンツと一振り。

その時、頭の中には松陽や高杉や桂、他の仲間達の顔が浮かんでいた。

「……………」

そのまま日が沈むまでずっと竹刀を振り続けていた。

第十訓

早朝。

役人が屋敷にやって来た。

松陽は何かを悟ったように黙って護送用の籠に入る。

「待てよ！」

籠の中にいる松陽に慌ただしく問いかける銀時。

周りの役人は屋敷に戻るように銀時を追い返そうとするが聞かない。

「大丈夫ですよ銀時。私はこれから用を済ませてくるだけです。だから帰ってくるまで小太郎や晋助と待っていて下さい」

籠の中から顔を覗かせ微笑んだ。

何だ、用事か…と胸を撫で下ろす。

銀時の後ろから桂と高杉が顔を出した。

「早く帰って来て下さいね」

「小太郎、2人のこと頼みますよ。お前は一番面倒見がいいのだから」

松陽の言葉に一瞬桂を睨む銀時と高杉。

行ってきます、と言って松陽はそのまま江戸の方向に行ってしまった。

「よし、何して遊ぶ？銀時！高杉！」

そんな桂の問いかけを無視して、歩き出す2人。

「ちよっ!?!どこへ行く貴様ら!?!」

「どこって、江戸だけど」

ケロリと銀時が答える。

「俺たちも行くんだよ、江戸に」

これまた高杉もケロリと答える。

「な!?!後で先生に怒られても知らんぞ!」

「じゃあヅラは留守番してろよ、俺等は江戸で暇潰してくっからよ」

「先生の用事が終わるまで江戸で遊んでくる」

スタスタと行ってしまう2人に

「お、俺も行く!」

「それにしても籠に担がれて江戸に行くなんて、先生偉い人みたいだな!」

ハハハッと何だか誇らしげに言う高杉。

銀時と桂もウンウンと顔を縦に振る。

3人は松陽が江戸に“用事”として自ら行っていると思っていた。しかし、実際はちがっていたのだ。

「松陽様!此度は江戸に何か御用事でも?」

籠から降りると、江戸の住民が話しかけてきた。

「ええ、ここに来るのは久しいですね。…あの人だかりは何ですか？」

男はああ、と頷くとあまり大声では言えないことらしいのか、松陽に顔を近づけ、

「まだ先の話ですが、でっかいターミナルが建つらしいですぜ。全く、天人共は好き勝手やりやがる、我が物顔で江戸の街を闊歩するようになって…」

「ターミナル…ですか」

「吉田松陽、早く来い！」

役人から呼ばれ、では、とお辞儀をしてまるで連行されるように連れていかれた。

———

3人もようやく江戸に着き、道の真ん中にポツンと立ち尽くしていた。

「どうせなら先生と一緒に江戸を回ったかったな」

「そう言うな高杉。先生も忙しいのだ。ここで待っておくというの

もなんだ、どこか暇潰しにいかんか？」

「暇潰しつてもなあ…」

不満気に溜め息を吐く高杉の様子に桂は高杉が何を言いたいのか察した。

それもそのはず、数年前、天人の圧倒的な勢力によって開国を許したこの国は天人によって占領されていた。辺りを見渡せば、侍ではない、異国の者がわらわらと町を歩いている。

幸いにも天人は江戸にしか留まっておらず、松陽等が住む田舎には手をつけていなかった。

しかし、江戸の町は少しずつ、着実に姿を変えていった。

「以前は侍の国と呼ばれていたが、今ではその名残もないな…」

「そーだな」

「高杉」

「あ？」

「…銀時がない」

「……………は？」

――…

ったく、アイツ等…どんどん先に行っちゃって、はぐれたじゃねーか。一体どこほつつき歩いてんだ？

仕方ねエか、とダルそうに呟くと、もと来た道を引き返そうとする…が。

「あり？ここ、どこだっけ」

やべーよ、迷っちゃまったよ…。

慣れない土地で1人になるのはあまり好きではない銀時は、とにかく高杉と桂を探す。

すると橋に人だかりができているのに気付いた。

そこにいる人達は橋から何かを見下ろしているようでその顔は良いものではなく、皆血の気が引いている。

見てはいけないものだと言時は分かっていたが、考えるより先に体が動いていた。

何か…嫌な予感がする。

銀時の予感ハ的中した。

急ぎ足で橋のもとに行き、下を見ると目を疑った。

人――…

それも体がない、頭部だけの状態のもの。

銀時はその首をじっと見ていた。

きつと、平常心で人の首を見れる子供は銀時くらいだろう。幼い頃から幾つもの死体を見てきたため慣れていたのだ。他人事のように思っていたが、そうはいかなかった。

「！」

あ…あれは、まさか？

見覚えのある顔だということに気づくのはそう時間はかからなかった。

先生のトコに来てた…男。

そう、何度か松陽に会っていたあの厳つい男だった。

何で…あんなことになってんだ？

すると銀時の横にいた町人が近くの人とボソボソと話し始めた。

「斬罪だってよ…反乱を企む攘夷志士を幕府の者が洗ってるさ」

「またかい？これで何人目だ…、攘夷志士よりも天人を取り締まってくればええのに…」

「侍達はまだ天人相手に細々と戦やっとりつてのに、幕府は何を考

えとるんかのう」

じょうい…しし？

“これで何人目？”他にもこうなつた奴がいんのか？

攘夷志士自体が一体何なのか銀時には理解できなかったが、町人の話からすれば幕府に目をつけられているのだと分かった。

一向に減らない人だかりの中。

銀時はそこを動こうとはしなかった。

その時——…

誰かにグイッと腕を引っ張られた。

「ガキが見ていいもんじゃないよ」

黒い着物を着た40代くらいの女が銀時に向かって言ってきた。

反射的に手を振り払った時、人混みの中にいた1人が銀時に気付き怒鳴り声を上げた。

「お前っ！ “鬼子” か！？」

それに伴い周りの者も騒ぎ始める。

しまった、と逃げようとする銀時の腕をまたもや女が掴む。

「来な」

「ちよっ…！？」

突然のことだったが、今はこの場から離れるのが先決。

女が行くままに銀時は走った。

第十訓（後書き）

分かりますか？

女性の正体：（＜|＞）

第十一訓

女について行き、今いる場所は甘味屋“魂平糖”と古びた看板がある店の前。

助けてもらったといえど女とは一定の距離を保っていた。

「安心しな。あたしゃアンタに何もしないさ」

そう言う店のある長椅子に腰掛け、懷から煙草を取り出し吹かし始める。

すると店の奥から丸メガネをかけたオヤジが出てきた。

「おうバアさん、相変わらず綺麗なこって」

「よおジジィ、相変わらず汚い店だね。悪いけどこのガキに団子を食わせてやってくれないかい？」

「こりゃ厳しいね、これでも四百年続いてる伝統のある団子屋なんだ。確かに汚い店だがそこそこ売れてるんですぜ、へへッ」
団子を持ってきたオヤジの言うことは無視して、

「アンタ団子食うだろ？こっち座んな」

と、隣をポンポンと叩く。

言われるがままにする銀時に女はフン、と笑う。

一方で銀時はさっきのことが頭から離れなかった。

「おい、大丈夫かい？」

ホラ、と銀時の前に団子を差し出すが受け取らない。

ハァー、と煙と一緒に溜息を吐く。

「さっきのことは忘れちまいな、よくあることさ」

「あの人は、悪いことしたから殺されたのか？」

「…してなくても、殺されてたさ。幕府は攘夷志士の存在が邪魔なだけだろうね、って、ガキにこんな話しても分かりゃしないよ」

「ふーん」

気の抜けた表情で遠くを見つめながら言う銀時。

「なんだい、いつまでもふてくされてんじやないよ」

頬を両手で押さえられ、グイッと女の方に顔を向けられる。

「ふてくされてねエ。俺は元々こんな顔なの」

「…！アンタ、どっかで見たことあると思ったら松下塾の奴だね？」

一瞬きよとした銀時、その後にそーだけど、と付け足す。

「ガキのくせして憎たらしい口を聞くねえ」

銀時の頬を摘まんで縦横に引っ張る。

「いっだ！いててっ」

初めて見せた無邪気な姿に女は微笑む。

「…あたしゃ、昔のアンタを知ってたけど…まるで別人さね、いい顔するようになったじゃないか」

俺のこと、知ってたのか…このバアさん。

…俺が変われたのは

アイツらがいたからだ――

「…色々もらってっから、大事なモンもちゃんと持てた」

「ふーん、その大事なモンとやらが今のアンタをつくったんだねえ」

「多分…」

って俺、知らねエババアに何話してんだっ!?

急に恥ずかしくなった銀時は女にビシッと指をさす。

「い、今の! 忘れろよっ! つーか、聞かなかったことにしろ! ババア!」

銀時の言葉に女の顔に青筋ができた。

「このクソガキヤ! アタシはまだババアじゃねえええ! さっきから生意気なこと言いやがって、今のアタシはねえ…一番輝くときなんだよ! ハートキャッチ☆タマキュアの主演はアタシしかないんだよオオオ!」

銀時の頭をグリグリと容赦なくしてきた。

「意味わかんね―…、いっでででで!」

「だからね、アンタ…」

女は手の力を抜く。

「……?」

目をそのまま銀時に向け、一瞬微笑むと、

「せっかく変わったんだ…、

…生きるな

そして、幸せになるんだよ…クソガキ」

女はニカッと笑って銀時の頭を撫でた。

「……？」

突然そんなことを言われたので、頭がついていかない。

丁度その時、自分の名前を呼ぶ声がした。
声がした方向に体を向けると、そこには――

「あ！」

見たことのない満面の笑みで銀時は松陽の元へ走った。

「フツ、前はあんな顔しなかっただろうに…ホントに変わったんだねェ」

遠くにいる松陽と銀時の姿を眺めていると、松陽が女に向かって一礼してきた。

すると横にいた銀時がこちらに走って戻ってきた。

息を切らしながら女の前に立つと

「さんきゅ、バアさん。あと団子も、うまかった」

団子をいつの間にか平らげていた銀時に、バアさんは余計だよ、と言う。

「元気でな、銀時」

――！

俺の名前…。

「じゃーね」

笑顔を向け再び、松陽の元へと駆けていった。

「綾乃さん、今の子って鬼って呼ばれてた子ですかい？」

その言葉にフンと笑うと

「もう、鬼なんていやしないよ。ありやもう、ただのクソガキだね
え」

「その通りですな…へへッ」

「あのガキの生き様見ると、アタシも生きなきゃねえ…て思うよ」

「綾乃さんの旦那も、その方が喜ぶでしよな」

「アハハ、ちがいないねエ」

煙草の煙が大きく宙を舞った。

第十二訓

役人に案内され、着いたのは評定所。

やはり、私を持て成すために呼んだワケではないみたいです。ね。まあ、そんなことだろうと最初から分かってはいましたが…。

松陽の両側には用心のためか、役人が就いていた。

すると、奥の間から幕府の肩代わりであろう上品な身をこなした者が、周りに護衛を幾つか就けて出てきた。しかし、肩代わりといえども政治を取り締まっている者、その立ち姿は堂々としており威圧を放っていた。

地に手をついて、ゆっくりと頭を下げる。

「面を上げよ」

「私のような身分の者が貴方にお会いできるとは、光栄にございませす」

相手の様子を窺いつつも、清楚に振る舞う。

評定所と分かっているのにも関わらず、落ち着いた様子の松陽に皆は内心驚いていた。

「堅苦しい事はよい。今日、貴殿を呼んだのは他でもない…、わたし

は聞きたいことが2つある。1つ、先日獄死した攘夷志士の1人が萩で貴殿に会ったと話しておったが本当か？貴殿が攘夷志士であることは耳に入れている。しかし、危険性のない者として目を瞑っていたが、今では松下塾とやらを開いているそうなの。もしやその教え子とやらを、後の攘夷志士として育て上げているのではないだろうか？これが2つ目だ…。どうだろうか？正直に申せ」

「……………」

「反乱を企んでおるのか？」

「滅相にございません。確かにそのような事はありませんけど、その方とは萩の良さについて話しただけです」

「そうか…」

「それに塾は攘夷志士に育て上げるために開いたものではありません。しかし、これから繋がる立派な逸材を育てようとも考えています」

「…ならば何故」

「私は父が残した寺子屋を継いでいるだけ。それに…大切な宝なのです。子供たちは何にも変えられない宝…、私は愛する家族と一緒にいたいだけなのです」

話を終えると、ハハハハハ！と声を寛大に上げて笑う評定所の者達。

「ククク…すまない、決して馬鹿にしてるんじゃない、わし等が貴殿の事を深く考えすぎていた。いやいや立派なお方だ。これはすまないことをした」

どうやら松陽の話を受け入れてくれたようだ。
これで誤解も解けた。

ここまではよかったんだ…。

松陽の運命は、この後大きく変わった。

「ささっ、無駄足を運ばせてしまったんだ。お詫びをしよう」

「……………」

私は今、信用を得た。

これは与えられたチャンスかもしれない…。

この機を逃したら、もう次がない…。

松陽は幕府に自分の意見を言う絶好の機会だと捉えていた。

ならば、今…私にできること…。

国のために、できること…。

今なら、きつと…私の考えを受け入れてくれるかもしれない。

だったら……。

一か八か――

「お待ちください」

立ち上がろうとした幕府のお偉い達を呼びとめる。

「この場を借りて、私の意志を表したい」

相手は一瞬躊躇ったが

「言うてみよ」

「私は、天人をそれぞれの国に帰すべきだと思います」

「……！何を言うか！？」

「簡単ではないことは承知しています。しかし、このままでは戦も続き、戦力を削り、共に死にゆく一方です。いずれこの国は支配されてしまう」

「松陽殿…己が何を言っているのか分かっているのか？」

「聞けば近々ターミナルが建つとか…、そうになると今以上に天人が

この地に降り、きっと江戸の政治にまで手を伸ばすでしょう。そう
なれば本当に、我々侍の国が滅びてしまう！」

「大きな戦を始めて、天人を追い払えと…？不可能だ」

「武力で押さえるのではありません…話し合えばきっと変わることも
あるでしょう。両国が平等に共存するために…」

「私は、この計画を実行に移すために攘夷志士と幾つもの密談を重
ねてきました」

「……！」

「理解して頂けると思い、今日がその機会だと…」

「もうよい」

話に終止符を打つ役人。

「…それが、意志か？」

「…はい」

分かってくれたのか…？

幕府の者もそこまで頭は固くないはず…。

「だとしたら、“貴様”はこの先、反乱を起こしかねないというこ
とだ」

——!?

態度が変わった…!?

「ちがいます! 私はただ——!」

「この国にとって、貴様は邪魔な存在だということだ」

幕府の者の合図で両腕を取り押さえられる。

「——っ! 貴方とあろう者が、天人と偽りの関係を築いてまで、この国を放っておくつもりですか!」

松陽は両側に就かれていた役人に引っ張られ追い出そうとされる。

「黙っていいように扱われるのですか!?! この国の未来は…! どうなるんです…!?!」

「吉田松陽、貴様に——…!」

——…

ガタン、と大きく音を立てて評定所の門が閉ざされた。

幕府が：そこまで落ちぶれていたとは：。
私の想いは、届かなかったみたいですね。

これも運命——。

『吉田松陽、貴様に——』

貴様に死罪を言い渡す——！
』

第十三訓

死を宣言されるとは、どうも不思議な感じですね。

江戸の町をぶらりぶらりと歩く松陽。

……。

あの子達には本当に申し訳ないことをした。

この事を言うべきか？

いや、言わないほうがいいだろう。

何をしだすか分からないですからね…。

ふふっ、と嬉しそうに笑う。

こんな時に笑う私はおかしいのだろうか？

自分の死が分かっているからなのだろうか？

さっきから子供達の顔が次々と頭に浮かぶ。

松陽の顔から笑顔が消えていく。

……。

伝わらなかった。

自分の想いが…。

私は自分自身で運命を決めてしまったのですね。

ただ、国を変えたい――

その一心だったのに。

いつかは自分の元を離れていく子供たちと、まだまだ一緒にいたかった。

私が死んだらあの子達はどうなるのか…。

あの子達を苦しめることになるのだろうか…。

虚しい――。

悲しい――。

悔しい――。

淀んだ気持ちだけが松陽の中を渦巻く。

私は間違っていた？

しかし、国の未来はもう目に見えている。

このままいけば、きっと人間は天人に逆らえなくなる。

どこから間違っていた？

どこから変わったんだ…国も、幕府の人間も。

少しずつ形を変えていく江戸の町を見渡していると――

！？

…銀時？何故ここに？

「銀時？」

名前を呼ぶと銀時が気づいた。

こちらに走ってくる銀時の姿。

その後ろには面倒を見てくれていたのか、煙草を銜えた女性が微笑んでいた。

松陽は深く一礼する。

「まったく…、ついて来たんですか？」

「驚いた？…途中で高杉とヅラと逸れたんだけど…」

あっ！と、声をあげ目線の先には2人の姿があった。

「まったく、迷子になってんじゃねーよ！馬鹿が」

「ばっ！ちげーよ！アレだ、ドラ○もんがいてな…」

「なにいい！？銀時！それは本当か！？猫…、いやネコ型ロボツト、しかし猫は猫…」

松陽の周りは一気に賑やかになる。

その傍らで松陽が悲しげな表情をしていることに、誰も気づくことはできなかった。

その後、高杉と桂を家まで送った松陽は銀時と一緒に帰っていた。

銀時は何となく感じていた。

松陽がいつもとちがうことを…。

それはきつと、高杉と桂も同じだろう。

「ねえ」

「……………」

「おーい？」

ハッとする松陽。

すぐに銀時の方に何ですか？と顔を向ける。

どうしたんだ？
考え事してんのか？

「あのさ…」

銀時には松陽にどうしても聞きたい事があった。

松陽の所に訪れていた、首だけさらされて亡き者となっていた“攘夷志士”のことを。

その事がどうしても頭から離れなかった。

「今日見た。俺、アンタんトコに来てた人が…死んでんの」

銀時の口から予想もしてなかったことを聞いて、ピクリと反応する。それに気づいた銀時は

「やっぱ、関係あんの？」

真面目に問いかける。

「そうだったんですか…。私は関係ないですよ。銀時は平気ですか？見たのでしょうか？死体を」

話を変えようと銀時を心配する松陽。

「うん、俺はヘーキ。ホントに何も関係ないの？」

「はい」

そっか、とホッとした銀時を見て松陽は罪悪感を感じた。

あたかも自分は関係ないという素振りを見せた松陽。
本当は大アリだった。

仲間。

国を変えるために自分に賛同してくれていた。
協力もしてくれていた。

すみません：銀時。

けれど、こう言うしかないんです。

松陽の横でニツと笑う銀時を胸を痛めながら見つめていた。

第十四訓（前書き）

話の流れは早いのですが、銀さんが先生と出会って
大体2年くらい経っている設定になっています！
今更ですが…。

第十四訓

パン！パン！

道場から竹刀の交わる音と、子供達の声が響く。
午後を回った頃。

おかしい…。

高杉は1人黙々と考えていた。

突然、「今日は授業を止めにして、剣の稽古をしましょう」って言うし…。

今までそんな事なかったのに。

いや、今までなかったからやったのかもしれないけど…。

しかも稽古って言うより、先生と1対1の勝負とか…。

「晋助！何ボーツとしてるんですか！次、晋助ですよ」

当然、松陽は手加減しているが、いつもより気合いが入っていた。
そして、終わった後には1人1人に何かと言葉を残していった。

「晋助、君は他の子供たちよりもよく攻めていますね。とてもいいことです。少々苦戦しました。私が教えた事をきちんと頭に入れている。これからもその調子で腕を上げて下さいね」

「何言ってるの？変なの」

高杉は何だか照れくさそうに、けれど嬉しそうに目を輝かせる。
高杉の後には桂が続いた。

「小太郎、いい剣筋ですね。君は安定感があって隙を見せない。前は剣を振るう事に躊躇していた君がここまで成長するとは…よく頑張りましたね。小太郎もその調子で腕を上げて下さい」

「松陽先生のおかげです！」

桂は素直に声をあげて喜んでいた。

「皆本当によく成長しました。さすがは私の弟子です。君たちは私の誇りです。ありがとう」

まるでもう会えないような言い方をする松陽。この言葉に深い意味あるとは知らない子供達。

「なんですかー先生。今日の先生変なのー」

あはは、と道場には陽気な声が湧いた。

「何でここにいの？ 今日稽古の日だっけ？」

寝坊して遅れて登場したのは、銀時。

やっと起きたか、と皆が呆れている。

「銀時、もう俺たちは終わった。あとはお前だけだ」

は？と、桂に半開きの目を向けた。

「先生と勝負すんだよ！ 早く位置につけ！」

何で突然？ と不思議に思っていた銀時だったが、すぐに胴着を着て竹刀を持った。

「いつでもかかってきなさい、銀時」

「今日こそはアンタに勝ってやる。手加減すんなよ」
そう言うバツ、と松陽に向かって竹刀を向けた。

これまで松陽と銀時は暇があつては2人で稽古をしていた。
いつも銀時が先に息をあげて負けるのだが、今日の松陽はいつにも
なく本気で銀時とやりあっている。
もちろん力は合わせているが。

そんな松陽の様子に銀時もいつもより燃えていた。

「らあっ！」

カァァン！と激しくぶつかり合う竹刀。

おお！と周りは息を呑んだ。

チィ、と舌打ちすると素早く体勢を整えて再び松陽に飛び掛る。

本調子の銀時に余裕を見せない松陽。

体格が大きい松陽とちがい、小柄な銀時は素早い。

こんなにも、成長していたんですね。

でも――

カァン！

一本の竹刀が宙をくるくると舞って床に落ちる。

「まだまだ、私は負けませんよ」

嫌味な笑顔。

銀時は竹刀が飛ばされた衝撃で尻餅をついている。

「手加減しろよ…」

プクーっとなりを膨らましている。

手加減するなど言ったのはどこのどいつだ、と周りは笑っていた。

「まったく、銀時の剣筋は読めませんね」

クシャっとなりを撫でる。

そのまま稽古は夕方まで続いた。

「じゃーな銀時、先生」

高杉と桂も屋敷を後にする。

松陽は一瞬、悲しげな表情になった。

「皆さん！」

その声に動いていた子供達の足は止まり、一斉に松陽の方に振り返る。

「………」

黙る松陽に

「「なーに？先生！」」

夕日に照らされる子供達の笑顔。

もう、見ることはないんですね…一生。

私の宝物。

「皆さん！」

「——さようなら！」

大声で、大きく手を振る松陽。

それに答えるように

「「さよーなら！」」

子供達も大きく手を振った。

「……」

松陽をじっ、と見つめる銀時にいつもの調子で「どうかしめたか？」と聞く。

「いや、なんでも」

深い意味なんてないのに。
いつもと同じなのに…。

何でか、違和感を感じる。

だって、何でそんな哀しい顔すんの？

また会えんのに、何でそんなに苦しそうなんだよ…先生。

「……せ、せん……」

「さあ、入りましょう。冷えますよ」

「あ…、うん」

元気がないのは気のせいだ。

不安なのも気のせいだ。

そう自分に言い聞かせて、銀時は屋敷へと入って行った。

第十五訓

その夜、松陽と銀時は縁側に出ていた。

銀時が松陽の膝を枕代わりにして横になっている。

「そういえば、今日銀時と手合わせしたとき、正直驚きました。人で練習でもしていたのですか？」 1

いきなり切り出された話にうとうとしていた銀時は目を覚ます。

「んあ？…だって強くなりてーもん」

だから毎日やってた。先生の見えない所でもずっとずっと。

「銀時らしいですね」

そして松陽はあ、と何かを思い出したように銀時に聞いてきた。

「私が前に言った、武士道は見つけることができたか？少し、難しかったかな？」

「……武士道っていうより」
考え込む銀時。

「もしかして、見つけたんですか？」

「え、いや…んー、いや！やっぱいい！ちがうから絶対」

「もったいぶらずに教えてくださいよ」

「だって、これ言ったら恥ずかしいーもん…」
無理にでも聞き出すつもりの松陽。

「…ぜ、絶対言うなよ!」
と照れ臭そうに言う

「…俺、アンタから言われたことずっと考えてた。『剣を振るう意味』っての。そしたら頭ん中はアンタやアイツ等が浮かんできて…」
途中まで言うのとチラッと松陽の方を見上げる。

笑われないかな…。

松陽は真剣に真っ直ぐ銀時を見て話を聞いていた。

「俺を変えてくれたのはアンタやアイツ等。だから思ったんだ、俺、護りたいって」

「護る?何を?」

「…アンタや、高杉とツラ。いや、みんな…護りたい」

「銀時…」

「こ、これが俺が『剣を振るう意味』!…間違ってる?」

「いいえ、それが銀時の武士道ですよ。…本当に銀時は変わりましたね」

松陽のひんやりした手が銀時の頭を撫でる。

「私の話も聞いてもらっていいですか?」

うん、と頷く。

「…私はずっと、この国を変えたいと思っていました。銀時も知っているでしょう？　こうやって私達が当たり前のように過ごしている時でさえ、戦場ではいくつもの命が失われているのを…」

「…うん」

「私はそれがたまらなく哀しい。同じ生き物同士で殺し合い、憎しみ合い…。戦をすることでまた憎しみが生まれて、こうやって負の連鎖が続いていく」
松陽は星が無数に散らばる夜空を見上げた。

「皆は等しく生きているのに…、争いがどんなに無駄なことか分かってない人達だっている…いや、分かうとしないんです」

「だから私は変えたかった。国を…」

「私は人も、天人も好きです。どんなにいがみ合ったって、双方心を持っている。どちらにも譲れない大切なモノを持っている」

「侍が国を守りたいと思って戦っているように、天人だって…」

「人と天人の両方が共に共存できる、本当の友好関係が築ける…そんな世界をつくりたかった。そのために最大限努力してきたつもりでした」

でも、結局叶えられなかった。

松陽は黙り込んでしまった。

「……………」

ムクツと起き上がると銀時は言った。

「アンタならできんじゃないかねエの？」

先生がどんなに優しい人なのか、俺は知ってんだよ。

俺を変えてくれて、いや、俺だけじゃない。先生に救われた奴はただ沢山いるはずだ。

sonde その次は他の星の奴等のことまで考えて、国を変えるって…。

すげーよ。

「アンタにしかできないことだって、あんだよ。…アンタなら変えられるよ。国」

目を逸らさず強い意志で言う銀時。

「…フフ、私は励ましてもらっているばかりですね」

夜空を見上げたまま笑う松陽。

「やっぱり…何かあったのか？最近変だ」

「……………銀時が一度も先生と呼んでくれないからです」

松陽は話を逸らした。

それに気づかない銀時。

「は？そんな理由で様子がおかしかったの？てか、俺がアンタのこ
と何て言おうが勝手だろ」

確かに口では先生って言ったことねーけど…。

ぐだぐだと話す銀時に松陽はふう、と自分にも聞こえない程度の息
を吐いた。

「おいで、銀時」

膝をポンポンと叩く。

子供扱いしやがって、と文句を言うがそれでも松陽の膝の上に乗る。

「…うわ！？何だよ！いきなり！」

松陽はぎゅうっと銀時に抱きついてる状態だった。

「今夜は銀時とずっと、ずーっと一緒にいます」

……？

「ま、別にいいけど」

ふぁーっと欠伸をして松陽にもたれ掛かる。

そのまま松陽の膝の上で寝息を立てて寝てしまった銀時。

夢の中で声がした。

先生の声。

あったかい声。

『銀時：

——あの子達のこと、よろしくお願いします』

この日、もっと先生と話しておけばよかった。
どんなにくだらねエ話でも、しとくべきだった。

先生の様子が何でおかしかったのか、問い詰めてでもちゃんと聞いてればよかった。

そうすれば何か変わってたかもしれないエ。
あんなことになってなかったかもしれないエ。

俺が『護る』って言ったのに…。

最期だった。

最期だったんだ――。

先生と過ごした最期の夜。

第十六訓（前書き）

ついに…！です。

第十六訓

意味わかんねエ…。

先生は何考えてんだ？

この日、銀時は萩の中心部の村にいた。

ふて腐れながらそこら辺に生えている雑草をぶちぶちと抜いていく。

『今日はどうしても大事な用があるので私の友人に銀時を見ていてもらいます』

『は？嫌だよ！俺が邪魔なら道場で暇潰してるし！』

『駄目です』

そう言われてブスーっと機嫌を損ねる。

いつもは「いいですよ」とか言ってくるくせに、そこまでして俺がいたら困るのかよ。

『もういい、分かったよ。行く』
怒って屋敷から出ようとした。

『銀時、コレを…』

？

先生に教科書と先生からもらった刀を渡された。

『持っていなくていいだろ？どうせまた帰ってくんだし』

少し間を置いて、持って行ってください。と強く言われた。

何か言いたげな先生だったけど、俺はそのまま行ってしまった。

屋敷からこの村までは大分距離がある。

寺子屋の子供達以外とはあまり関わっていなかったため、村に馴染めないでいた。

するとそんな銀時を察してか、高杉と桂が途中やって来てくれた。

これから起こることを知らない3人はそのまま日が暮れるまで遊んでいた。

―――

「よし、暗くなったことだし帰るぞ。銀時、ヅラ」

腰を上げ、着物についた砂をはらう。

銀時は今日面倒を見てくれたおじさんに声をかけた。

「おじさん、俺帰るわ」

すると、きよとした顔で

「ああ、ボウズはここにいるようにオラ、松陽先生から言われたんだ。帰らなくていいんだよ」

はあ？

「な、なんで？」

どうした銀時？と高杉と桂が聞いてきた。

「オラ、理由は知らん。ただそう言われたからな」

「：何だよ、クソッ」

ザッと地面を蹴る。

「それほど大事な事があるんじゃないのか？先生にも事情があるのだろう、我慢しろ」

「明日ヅラと一緒にテメーを迎えに来てやるから、その後先生のトコ行こうぜ」

高杉と桂に説得されて、わあーったよ、とポリポリ頭を掻く。

「じゃ、また明日な」

そう言って2人は帰って行った。

「……………」

辺りはすでに暗くなり始めていて、すこし先の道は真っ暗で何も見えなかった。

村の灯りがポツポツと徐々に点いていく。

さっきまで聞こえていた子供の声はいつしか無くなっていて、虫の鳴き声しか聞こえない。

おじさんは家の中に入り、夕飯の支度をしていた。

「悪いな、おじさん」

目を盗んで、銀時は暗がりの道の中に消えていった。

「ふう」

何をするわけでもなく、ただ部屋の中で立ったままの松陽。ふと、外を見る。

「満月ですか」

雲一つ無い夜空、一つ一つ輝いている無数の星達。

蠟燭が必要ないくらいに 月が辺りを照らしていた。

今頃みんなは夕食を食べているのかな？

ああ、昨日頂いた煮物まだ残っていたような…。

夕食といえば、銀時が作った宇治金時丼。

小豆をご飯にかけただけのシンプルなどんぶり。

美味しそうに食べていましたね。

無理矢理口の中に入れられた小太郎と晋助は青い顔して厠に駆け込んだ。

銀時には内緒にしましたが、あの後私もつまみ食いして厠に駆け込みました。

将来が不安です。

糖分ばかりとりすぎて病氣にならなければいいのですが…。

晋助はもう習慣のように銀時と小太郎にいじられていましたね。

何かと周りと張り合っていて…。

哀しい時も強がって、弱音を一切吐かずに我慢していた日もありま

したね。

でも晋助が、私のようになりたいと言ってくれたとき…複雑な心境でしたが嬉しかった。

晋助は大きくなったら私のようになるのか…。

うーん、想像つかないですね。

小太郎は皆のまとめ役みたいな存在でしたね。

よく喧嘩する銀時と晋助に割って入っていつも叱って。

友達想いの優しい小太郎。

けれど他の子供達とちがって少々趣味が行き過ぎたところがあった…。

名前、えっと…ステファン？だっただろうか。

その人形をどこから持ってきたのだろうか、いつも持ち歩いていましたね。

小太郎には人一倍の正義感があって、私も小太郎に教えられたことたくさんありました。

毎日毎日、子供達と触れ合って、馬鹿騒ぎしてましたね。

喧嘩してはまた仲直りの繰り返しで…、手に負えない時期もありましたが、楽しかった。

子供達が傍にいてくれたから、私は頑張れた。

結果的に失敗に終わってしまったけれど、悔いはない。

カタ——

松陽から笑顔が消える。

「来ましたか…」

「吉田…松陽とお見受けする」

「確かに、私がそうです」

「危険人物として貴様の首を我がこの手で斬り捨ててやろう」

体格のいい男。

顔は編み笠を深くかぶっているのではっきりと分からない。
しかし身なりで分かる。

…これはこの国を開国へと追いやった天人。
幕府を脅かす天導衆の1人ですね。

私が思うに、これから江戸を大きく変える、いや、支配するであろう、最も危険な天人。

腰には大剣を携えている。

「ほう、我を知っておるのか…ククク」

不気味に笑うその男。

「なぜ、あなたが私を？」

間髪入れずに男は答えた。

「…邪魔なんだよなア…我々にとって貴様は。これまでこのホシを手に入れるためにどれだけの苦勞をしてきたことか、貴様の言う計画、まだ我々を追い出そうとしていると企んでいるとは…全く、哀れな男よ。黙っていればよかったものを」

「…やはり、あなたがたは幕府が持つ実権にまで手を出すのですか？この国を支配するおつもりですか？」

「幕府？あんな猿ども…ただのお飾りではないか。我々にいいように扱われているとも知らず…、いや、知っていても反抗ができないのか…ククク」

「…質問に答えてください」

「うむ…まア、そうだ。いずれこの国の実権を握り、我々の思い通りに作り変えてみせるわ」

「……」

「貴様も“侍”か？我々にとって一番目障りな存在だ。各地で反乱を起こしおって…戦力がことごとく削られていく」

余興は終わりだ、とガシャンと大剣を松陽に向ける。

「何か、言い残すことはあるか？侍…ククク」

「……………」

「どうした？死を恐れて口も開けんのか？」

「どうか、子供たちにだけは手を出さないでください」

男は黙ったあと

「どうかな？」

「…お願いします」

「己のことより、子供の事か。強がりおって、…我の手によって
逝くがいい」

男は剣を構えた。

「覚悟はできています」

その場に座り込み目をつぶる松陽。

「…？抵抗せんのか？」

「私の運命は決まっています。ここで逃げ延びたとしても私の未来
はない。私は国のために死ぬ」

「…なんとも、本当に哀れな男だ。……いいだろう」

男は一度空を重く斬ると、松陽の前まで足を運び…

大きく剣を振りかぶった。

「なに……してんだ」

ピタッと男が剣を止めた。

松陽はハッと振り返る。

そこには紛れも無い……

「ぎ、んとき……なぜ、なぜ来たのですか」

動揺を隠せない松陽は震えた声で言う。

はぁ、はぁと息を切らしている銀時。

「おやおや、感動の再会ってトコロかい？……ククク」

「なにしてんだって……っ……聞いてんだよ……!!」

男目掛けて走り、刀をビュッと一振り。

男は軽やかにかわし、後ずさりする。

その拍子にかぶっていた網笠が落ちた。

肩まで白髪がのびており、頬には傷跡が2つ。

ギラリと鋭く光る不気味で赤い目が銀時を睨んでいた。

「駄目だ銀時！…っお願いです！その子に手を出さないで下さい！」
松陽は急いで立ち上がり、銀時が持っている刀を奪い男の方に向ける。

そして銀時を自分の後ろへとやる。

「銀時！ここから離れて下さい…」

「ふざけんな！なんでさっきコイツに殺されようとしてたんだよ！死にてエのか！？」

「お願いです銀時…。私の言う事を聞いて下さい…」

「アンタはどうすんだよ！」

「銀時…これ以上、何も言わないで下さい。でないと、私の覚悟が鈍る…」

銀時は両手を強く握り、思い切り松陽の体に叩きつけた。

「覚悟って何なんだよ！！死ぬことが覚悟なのかよ！！そんなの…いつもの“先生”じゃねェ！！」

銀時の言葉にピクツと反応する。

松陽と銀時のやり取りを黙って見物していた男は、再び剣を構える。
「そろそろ…いかせてもらおうぞ」

ガキイイイイン

刃物が鋭く交わる音。

「…!? どういうつもりだ貴様。潔く死ぬんじゃないのか…?」

「くっ…、考えが変わりました」

「クククク…おもしろい、貴様の持つ力、とくにご覧入れよう」

キイイイン

再度松陽と男は距離をとる。

「先生…」

「銀時のおかげで目が覚めました」

けれど、さすが天導衆の1人…。

たった一回交わるだけで、体が悲鳴をあげた。

力の差がありすぎる…。

隙を見れば確実に私は…。

そうなる前に銀時を逃がさなければ。

「銀時、逃げてください」

「…！嫌だ、俺は——」

「私は大丈夫。もう自ら命を絶とうとは思っていません。だから、行きなさい——っ」

「先生！しゃがんで！」

男の剣が松陽の頭上を空振る。

松陽は体勢を立て直すのと同時に男の剣を持っている手に刀を振った。

「おのれ…」

大剣は庭屋敷の外に弾き飛ばされた。

男は懷から小刀を取り出して動き出す。

！？

私じゃない！

狙いは…

銀時だ——！

「邪魔だ。小僧」

「銀時！……っ逃げて！」

「……っ」

来る。

こっちに来る。

足が動かない。

震えて動かない。

俺は…死ぬのか…。

ぎゅっ―

怖くて、怖くて、目を閉じた。

頭の中は真っ白。

「……っ」

恐る恐る目を開けると銀時の目の前に松陽がいた。

「ぐおおおおっ…」

低く、けたたましい唸り声を男は上げている。

男をみると心臓に刀が刺さっている。

男は胸を苦しそうに押さえてその場にうずくまった。

やったのか…。

「先生…」

「ゴフッ」

――！？

「先生！？」

銀時は松陽の前に回りこんだ。

「……っな…」

銀時が目にしたもの。

それは、松陽の体に突き刺さる無数の小刀。
右脚、右太股、胴体に2本、右腕、左肩。

「せ、せんせエ…」

ショックで全身の力が抜けて、ヘナヘナと崩れ落ちる。

その傍らで倒れた蠟燭の火が障子に燃え移った。

「大丈夫ですか？ 銀時…っ」

松陽は口から血を吐いた。

畳が血で滲み、染み込んでいく。

「…俺の…せい、で…、俺の…」

混乱している銀時は同じ言葉を繰り返している。

松陽は自分の身体に刺さった小刀を一本一本抜いていく。
そのたびに血が着物を滲ませていた。

「銀時、しっかり…。さ、早く逃げなければ」

松陽の声が銀時に届き、我に返る。

銀時は松陽を小さな体で支えながらも外まで引っ張っていく。

「ごめん、先生。…ごめんなさい。俺のせいで」

銀時の言葉に返事をしたいの、そんな気力さえ今の松陽にはなかった。

いつもより長く感じられる廊下。

進んでも進んでも出口が見つからないような錯覚に陥る。

もう大丈夫だ。

先生、俺が絶対先生を護るから…。
だから死ぬな。

死ぬな。

すると急に銀時に松陽の体重が重く押し掛かる。

「うわっ…」

銀時はそのまま松陽の下敷きになってしまった。
急いで抜け出して、再び松陽を起こそうとするが

「銀時、もういいです。…私のことは放っておいて逃げなさい」

「嫌だ！一緒に行くんだ！」

「私はもう長くない…自分でも分かります。だから…」
急所を突かれたみたいで。

もう痛みを感じれなくらいに神経が麻痺してるようだ。

「ふざけんじゃねエ！先生を置いて行けっかよ！」

「銀時。これはもう君が関わってはいけない問題なんです。命を落としかねません。銀時をそんな危険にさせない」

「…っ、俺は、大丈夫だ」

「私の気持ちを分かってください」

「だからって、置き去りにはできねエ、立って先生。外に早く出ねエと」

銀時に立たされ出口に向かって再び歩き出す。

「俺が先生を護るんだ。前にも言っただろ」

痛みに顔をしかめながら笑みを浮かべると、全く…、とボソリと呟く。

「…やっと、“先生”と呼んでくれましたね」

「……そう、だっだったけ？」

「本当に一生呼んでくれないかと思ってました」

「……」

ホントはずっと呼んでたよ。
心の中で…。

最初は意地張って言わないだけだったけど、そのままタイミング逃して言いにくくなって。

何度も口に出そうとしてたけど…。

いつの間にか屋敷の門の前までたどり着いていた。

ガシャアアン――

男が倒れた方の部屋から音がした。

「アイツ生きてたのか！？先生、急いで…！」

すると松陽は立ち止まった。

「先生！早く！」

「私が食い止めます。銀時は逃げるのです」

その言葉に銀時はついにキレた。

「さっきから逃げる逃げるって、俺は逃げねエって言ってんだろ！聞き飽きたんだよそんなの！」

「銀時」

「こうやってる間にアイツが来ちまう！先生…！」

松陽が銀時を強く抱きしめた。

ポタ――

「……………！」

銀時の額に雫が落ちる。

ポタッポタッ

泣いてんのか？

先生？

「私だって、願うならこの手を離したくない。まだまだ一緒にいたい……」

また一つ額に落ちた松陽の涙。

「けれど、それはもう……叶うことはないんです。私はたとえ生きていようと、もう銀時達のそばにはいられないんです」

私はもう幕府に完全に目をつけられてしまった。
もう、一緒にいることは許されない。

松陽の言葉に涙が止まらない銀時。

「だから、私は最後になろうと私の大切なものを護ります」

「……っ、うう……聞きたく……ねェ」

「私は自分よりも子供たちが大切なのです……。銀時が大切なのです」

「俺たちにとっては……っ、大事なものは先生……ヒック……なんだよ」

「…ありがとうございます。その言葉が聞けただけでもう十分です。さあ…」

松陽に押され一歩前に出る銀時。

「自分の信じるがままに、

……生きなさい」

その時――

「ミツケタ」

「…っ先生は俺が――!!」

その瞬間に男は銀時の所に素早く現れ腹を殴り、気絶させて屋敷の外へ放り投げた。

男がとった行動に理解できないでいる松陽。

「どうした？ 貴様が望んだことであろう。今回だけは子供とやらを見逃してやる」

「……………感謝します。少々手荒でしたが…」

男は自分に刺さっていた刀を松陽の前に投げた。

「…私の身体に傷を入れたのは貴様が初めてだ。殺すのは惜しい…。刀を持って、最後は武士として死なせてやろう」

「…言われなくとも」

地面に落ちた刀を手に取り、男に向けて構える。そして地を大きく蹴り上げた。

「「うオオオオオ!!」」

あの子たちと過ごした時間がまるで夢のようだ。
あの子たちは私の唯一の宝。光そのもの。

曖昧に生きていても心が未熟でもそれでいい、大切なモノがあるなら。

君たちが迷うのなら、喜んで私が道しるべになりましょう。
あとは、自分たちを信じて進んでいけばいい。

私は子供たちにとって大切な存在になれていたでしょうか。

私は子供たちにとって誇れる先生になれていたでしょうか。

子供たちに色々と教えてきていたつもりでしたが、教えられていたのは私の方でした。

もう、二度と会えないのですね。

子供たちと笑いあうこともできないのですね。

大きくなって立派に成長しても、私のことを思い出してくれるだろうか。

それとも、私は過去の人物となって忘れられているだろうか。
それは哀しいけれど、そっちの方がいいのかもしれないね。
過去に囚われてばかりでは、前に進めませんから。

私がいたことを忘れないでほしい。

いや、どうか忘れてほしい。

矛盾していますね。

どうか、私が死んでもありのままできてほしい。

この先どんな運命が待ち受けていようと生きることだけはやめないでほしい。

本当はそばで皆さんの成長を見届けたかった。
それだけが心残りです。

だから私は遠くから皆さんのことを見守っていることにしましょう。

別れは辛いけれど

皆さんの未来を信じています。

私を先生にさせてくれてありがとうございます。

出会えてよかった。

私の大切な大切な、かけがえのない子供たち。

——幸せになってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7483t/>

受け継がれたモノ

2011年11月16日20時42分発行